

虚人たち

筒井康隆



中公文庫



中公文庫

きよじん
虚人たち 改版

定価はカバーに表示してあります。

1984年3月10日初版発行
1998年2月3日改版印刷
1998年2月18日改版発行

著者 つつ い やす た か
筒井康隆

発行者 笠松 巖

発行所 中央公論社 〒104-8320 東京都中央区京橋2-8-7
TEL 03-3563-1431(販売部) 03-3563-3664(編集部) 振替 00120-4-34

©1998 CHUOKORON-SHA, INC. / Yasutaka Tsutsui

本文・カバー印刷 三晃印刷 用紙 王子製紙 製本 小泉製本

ISBN4-12-203059-5 C1193

Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

虚 人 た ち

筒 井 康 隆

中央公論社

目次

虚人たち

7

解説

三浦雅士

283

虚人たち

今のところまだ何でもない彼は何もしていない。何もしていないことをしているという言いまわしを除いて何もしていない。窓の外は晴れている。いや。曇っているかもしれないがその保証はない。なにしろ雨が降っているかもしれないから。それでもやっぱり晴れているのかもしれない。窓ガラスが時おり光るのは太陽の光なのかもしれないが横なぐりに吹きつけてくる雨滴が何かの灯火に照らされているのかもしれない。雪明かりなのかもしれない。それどころか晴天と曇天と雨天がそんなことはあり得ないとする日常的思考を否定したり嘲笑したりするために数秒置きのくり返しを演じているのかもしれないではないか。そう考えてこそもしそれが雪明かりだとすれば雪明かりがちらつくなどという非日常性も納得できようというものだが彼はあいにくそんなことを納得する気すらない。確かなことは屋外の天気は不明であると彼が判断するための窓ガラスがそこにあるということだけだ。屋内にいる彼は何もしていないし窓の外の天気を見定めようと眼を凝らして

いるのでもない。窓ガラスだけが彼に彼が屋内にいることを教えてくれている。そこは彼の家である。彼はそれを知っているし家の外の天気は今の彼に無関係であるということも心得ている。だが彼にとって現在の天気が晴れているか曇っているか雨であるかがどうでもいいのと同じ程度には家の中の様子がどうでもよくはないのだ。そこが彼の家である限り家の中の様子は彼という人物を格づけするものであり彼の同居人がもしいるとすればその人物を想像させるものでもあるからだ。だから彼は家の中の様子をせめて窓の外が晴天か曇天か雨天かがわかる程度にわかっているなければならない。彼は屋内を見まわした。柱時計がある。針が六時六分を指しているその文字盤はローマ数字だ。振子がついている。アンティーク・ブームに乗った新品などではなく本ものの古時計である。座敷は八畳の間で床の間がある。山水画の掛軸は汚れている。それがどんな山水画かよくわからないのは汚れているせいかもしれないがそもそも汚れていなくてさえよくわからない山水画だったのかもしれないし山水画という字が書かれているだけという可能性さえある。障子も襖ふすまも汚れている。簞笥たんすも古い。その座敷内にある家具のうちでの新品はテレビだけだ。新品であるが故にそのテレビは無個性でその無個性さたるやたとえそれがXT三十四・II型であろうとVCE六〇〇〇九・A型であろうと無個性であることに変わりはないほどだ。テレビの画面は何も映し出していない。青っぽく光っているだけだ。いや。何かが映りは

じめた。彼はそれを今まで八畳間の中央に座ってじっと見ていたのだ。テレビの画面に映し出されているものはもちろんテレビ番組だ。音楽番組かもしれないしドラマかもしれないしニュースかもしれないがそのうちのどれでもないかもしれない。はつきりしているのはテレビ番組であることだけだ。それがもしテレビ番組でなければ彼が今までテレビ番組を見ていたことにならないし彼はそれを画面に映っている色彩や形が単にこれはテレビ番組であるとししか表現していないことによって知ることができたのだ。その彼は洋服をきちんと着て正座をしている。帰ってきたばかりなのかもしれないし外出しようとしているのかもしれないがそのどちらか以外ではない。正装しているからだ。しかし彼は疲れていて空腹だ。帰ってきたばかりなのだと彼は思う。きつと帰ってきたばかりなのだとそうに違いないのだと思い外出はしないでおこうと彼は思う。したがって今は夕方の六時六分なのだ。朝の六時六分ではないのだと彼は確信する。いや。もう六時七分になった。朝の六時七分にこんな疲れていて空腹である筈^{はず}はないのだと彼は自分にそう言い聞かせる。彼は自分の中に保守性の臭気を嗅^かぎとる。それは今のところまだかすかだ。彼は立ちあがった。座敷を出た。廊下は両側がゾラコートを吹きつけた壁ではさまれていてうす暗い。壁のスイッチをひねろうとした彼はもしスイッチをひねって電燈が点^つかなかった場合のことを知らずしらず予想し自分が心の準備をしはじめていることに気づく。そんなことを考えてはい

けないのだと思いながらスイッチをひねるとあたり前だと言いたげに廊下の電燈が点く。塩地と思える洋風のドアを開くと中は寝室で部屋の奥に布団の整えられたベッドがふたつ並んでいる。手前には三面鏡があり鏡台には女性用化粧品びんの瓶が並んでいる。倒れている瓶もある。女の同居人がいてそれは妻だと彼は思う。妻の名前は現実には絶対にあり得ぬ運子珍子万子その他をひっくるめたすべての女性用固有名詞のどれであつても不思議ではない。寝室の電燈をつけ三面鏡を開くと彼の顔が映った。眼鏡も髭も白髪もない中年男の顔だ。肥つてもいず痩せてもいず傷痕も吹出物もない。あるのは眼鼻立ちだけだ。彼が自分の顔を見るのはこれが最初だがこの鏡に自分の顔を映して眺めたことは数知れぬほどである。ただ単に顔立ちだけしかないその顔を見て彼は自分を知ろうと努め鏡の中の自分にその成果が反映することによって彼はますます彼になっていく。ベッドも三面鏡もその特徴を言いあらわせるほどの古いものではないことがわかつて彼はまた自分の保守性を感じる。鏡の中の顔が示す年齢を見てそれも無理はないと思ひむしろ自分が座敷にある古い家具類をそのままにしているのは貧乏のせいでもなければ浮わついた懷古趣味でもないと知つて彼は幾分かはそれが誇らしい。廊下のつきあたりは食堂と台所で部分的に改装のあとがあつて改装されていない部分を含めていずれも洋風だ。新しいものは食堂のテーブル・クロスでありいちばん古そうなのは台所中央の調理台だがそれすらさほど古いものでは

ない。食堂の壁のま新しい皿時計は停っていた。食事の支度はまったく出来ていない。電気釜の中では五合ほどの米がまだ水に浸ったままだし鍋も出ていない。米の量で妻以外にも同居人がいるらしいことを彼は知る。買物籠の中には財布があった。財布の中には一万三千円と硬貨が十枚ほどある。妻の姿が見えないのは買物に出かけたからではないらしいと悟り彼は空腹を思い出して腹を立てる。妻またはその他同居人の姿を求めて彼はどことなく生活の匂いのない自分の家の中をさまよう。便所には臭気がなかった。大声で名前を呼ぶことさえできないその同居人のうちのひとりが自分の妻であることにも腹が立つ。まさか妻妻妻と連呼するわけにもいかなかったただのおいでは間が抜けていて妻の名を知らぬ自分がみじめになるだけだ。厳密には同居している女が自分の妻だと認証されたわけではない。口惜しいことには瞬間瞬間に自分や周囲を見出して行かねばならぬそんな環境を彼は理解しているし現にそこに棲息しているのだ。やがてさつき座っていた座敷の障子の裏側にある階段を彼は発見する。両側の壁が落ちていて靴下を穿^はいていてさえ足の裏に土のざらつきの感じられる階段を彼は二階へあがった。廊下の片側は手摺り越しのガラス戸で雨戸はまだ閉められていず片側には和室をわざわざ洋間に改造したらしい部屋がふたつ並んでいる。襖^はを嵌め殺^はしにして濃緑色のビニールの壁紙を貼^はっているのだ。そのような乱暴な改造に対して自分の中に違和感があるのかないのかもよくわからないがとりあえず

はないか順応したかどちらかなのである。彼は納得しなければならぬ。手前のドアには貼り紙がしてありマジック・インキで書かれたその字はひどく稚拙である。

入室厳禁・目下虚構中

こんな事をわざわざ書かなくてもわかりきったことなのにと彼は思う。同居人のひとり
はあきらかに子供だ。当然自分の子供であろうと彼は思ってみる。男の子の字だ。年齢は
よくわからないが小学校低学年ではないだろうし彼自身の年齢から考えればすでに大学を
卒業しているということもあり得ない。自分の息子がもし高校生か大学生でこの字の稚拙
さに相応ふさわしい人格を持っていたらと想像し彼は寂寥感に襲われる。室内で鈍い音がし次い
でちんという小さなガラス食器を叩くような音がした。それはただそこに人がいることを
彼に教える為だけの音ではなくあきらかに彼とは無関係な音だ。誰かを下宿させているの
かもしれないと彼は思いついた。そう考えれば今の音の性格を首肯できるのだ。思わず周
囲の様子を見まわすとあたりはさりげなく存在する。さりげなくここに在るぞと言うかの
如くさりげない。奥のドアは半開きのままだ。室内は薄いブルーとうすいピンクを基調に
したキャンディ・トーンで乱れたベッドのすそにグリーンの柔らかそうな子熊。窓ぎわに
は枯れたドライ・フラワー。壁には男性歌手らしい産毛うぶげの生えた青年のポスター。プレー

ヤーその他小型のステレオ・セット。レコード立て。勉強机と椅子があり椅子には大柄な花模様の赤いクッション。批評を拒否し若い娘の部屋として典型でありすぎること指摘されることさえ拒んでいるような部屋である。彼は机の前に立ち本立てを一瞥する。^{いちべつ}大学受験用の各科目の参考書に混り赤い合成皮革の表紙によつて秘密めかされた日記がある。取り出して開くと細いペンで横書きの女文字。見えない。字がにじんでいる。いや。細字であることがわかるくらいだからにじんでいるのではない。ぼやけているのでもない。何が書いてあるかがわからないだけだ。彼の目が悪いのではない証拠に一部分だけははっきりと読み取ることができる。

「兄は嫌い」「父はまた」「と会社で何かいやなこ」「円を母に貰」

勉強机に備えつけの眼ざまし時計は六時十一分である。なぜ高校生の娘までがこんな時間にかにいないのだと彼は思う。父親としての当然の心配というにはあまりにも腹立ちの度あいが大きいのでは彼はまた空腹を思い出す。だが突然彼はごく一般的には環境や人間以前に事件が存在する筈であることを悟った。とすれば彼の空腹度の進行と同時に事件も進行しているのだから彼の空腹は当分満たされないことになる。空腹に対するやりきれなさまでがどんどん進行するままでもはや開始された事件の進行に身を委ねるといった不用意なことが許されてよいものか。しかし現実とはそのようなものであるらしい。あらゆる環

境下における他人にとっての現実にもそのようなことがあり得る以上彼にとつてもそういう現実はあると思わねばならない。たとえ彼の空腹が事件の滑らかなまたは複雑な経過または進行の障害となつてもだ。彼は階段をおりた。階段をおりた正面に玄関の間があることをもうそろそろ今さらながらとつけ加えるべきかとも思いつつ彼は知る。そこは二畳の間で三和土はさらに狭い。玄関のガラス戸のいちばん下の部分がわれていてガラスの破片が三和土に散らばっている。それらガラスの破片の表面に光はない。やはり妻と娘の不在は事件の予兆であつたのかと彼は思い知る。屋外から足で蹴破つたに違いないのだ。三和土には靴がある。何足かある。うち一足はあきらかに彼の靴である。してみれば彼が外出から帰つたとされる時間そのガラスの破片はすでにそのあたりに散らばつていたのである。なぜその時彼がそれに気づかなかつたことになつてゐるのか。彼が事件に遭遇する以前のことはどうであつてもよいのだろうか。彼は靴を穿いてガラス戸を開け屋外に出た。屋内にいた時の彼へ義理立てでもするかのように天気は執念深くまだ明らかではない。晴れてもいず雨でもない。天気そのものが存在しない。強いていえば虚空に天気無用の巨大な判をべったり捺した^おような天気といえる。ガラス戸とは眼と鼻の先ほんの一メートル足らずのところコンクリート・ブロックを積みあげただけの門がある。まったく馴染^{なじ}みのない屋外の空気の中を切り開き押し進むようにして彼は門を出た。幅の狭い舗装道路の両

側には小住宅と商店が混在しているように見えるがそれはおそらくこの地域が商店街からわずかに離れているだけの地域であることを示すためだろう。彼の家の斜め向かいにある家庭用金網製品を製造販売しているらしい小さな店では店さきの作業場に店主と思える男がうず高く積みあげた製品に囲まれてすわりこみ手を動かしている。器用に動かしているとしか見えないその手で金網を加工して箒ざるや籠かごや篩ふるいや洗い桶などを作っているのである。うとしか彼には思えない。部厚ぶあつそうな作業着を着て地下足袋をはいたその男は黒くいかつい顔つきをしている癖に仕事柄そうなったのだと言いたいのかまるで女のようにながい睫毛まつげをしていて彼が門を出るとその金屑をいっぱい光らせた睫毛の下からちらと彼を覗のぞいた。すぐに眼を伏せて仕事を続ける男の方へ彼は歩き出そうとした。自分の家の玄関付近で何があったのかを男に訊たずねるつもりだったのだが男はすでに男と男の仕事に関する事柄以外は何ものも寄せつけぬ態勢に入ってしまったている。しかしおれは他人の質問に答える為にだけここですら金網を加工していたのではないという男の全身の主張がすでに男の目撃したある事件の存在を証明しているのだ。歩き出した彼は道路の中ほどで自分のそれとは相容れぬらしい男の環境にぶつかつた。それは粘液質だったがフォース・バリヤームかくやと思えるほどの強靱さである。彼自身のものとはまったく異なるらしい男の行為の主題が男のフィードルの存在を主張している。自分の力場がそれほど微弱なものとは思つ